

富士の民話 あれこれ

雨ふり山

大淵の大坂に「雨ふり山」と言われているところがあります。この山へ入った者は、雨に降られて逃げ帰って行くことが多く、村の人々からいつからともなく「雨ふり山」と呼ばれるようになったという事です。

今回は、大淵第二小の「富士本みどりの少年団」に案内してもらいました。



△「富士本みどりの少年団」 左から渡辺美幸さん、渡辺ゆかりさん、石川奈々美さん、岩間知恵子さん

大淵第二小の生徒は、全員が富士本みどりの少年団。10年ほど前の先輩たちが、「雨ふり山」の言い伝えを書いた看板を現地に立てました。

「雨ふり山の話を知ったのは去年のこと。初めて来たときは、最初から雨が降っていた」「この言い伝えは、やたらに山へ入って木を切ったり、ごみを捨てたりして、緑を大切にしないと山の神様が怒るよ、という意味があるんだと思う」と話していました。

ちなみに取材のときは、残念ながら(?)雨は降りませんでした。

ある秋の日のこと、一人の若者がまきを取りに山の中へ入っていききました。仕事を始めると間もなく、今まで晴れていた空が急に黒雲に覆われて、雨が降ってきました。若者は仕方なく帰ろうとすると、雨はピタリとやんで青空が見えてきました。そこで再び仕事に取りかかると、また大粒の雨が前より一層ひどく降り出しました。若者は、「変だなあ」と言いながら道具を片づけると、また日が差してきました。

気味が悪くなりましたが、せっかく来たのだからと、仕事にかかりました。すると、今度は雷と大雨と一緒にやってきました。若者は顔色を変えて村へ逃げ帰りました。

この話を聞いた村の人たちは、

「そんなばかなことが……今まで聞いたこともない」と言って笑いました。

しかし、その後も村人たちがこの山に来るたびに、大雨に降られて逃げ帰ったので、いつしかここを「雨ふり山」と呼ぶようになりました。



こちら編集室

富士市青少年の船に同行して、ビデオ取材のために8月15日から19日まで奄美大島へ行って来た。台風を避けての船旅だったのに船酔いの子供たちが続出。しかし、奄美大島の青く澄んだ海と大空に迎えられ、一転して子供たちは持

ち前の元気を爆発。サンゴ礁を泳ぐ熱帯魚に歓声を上げ、ビーチボールを波に揺らす。少し日焼けした子供たちは、思い出を胸に、一回り大きくなって帰ってきた。肩にずっしりと残るビデオカメラの重さが心地よい。

お茶くみ、掃除、たばこの吸い殻の後片づけ。これらは女子職員の仕事でしょうか、それとも職務外のサービスでしょうか。意見の分かれるところです。男性のほとんどは、やってくれさえすればどちらでもいい、とい

う考えでは、やりたくないのならよせ、という声も聞こえます。男が入れたお茶なんてまずくて飲めない、と言う人も。でも、今どきの男性は、女の私などより料理がうまいとか。それならば…。続きは9月20日号の特集で。

広報ふじは環境に優しい再生紙を使っています